

自由討論

(中村) それでは、会議を再開したいと思います。先ほど、各県知事あるいは市長から、「青少年育成・交流」を共通項目とした、あるいはその他の項目についても事例をご発表いただきましたが、ここからは自由に討論する時間を持ちたいと思います。ご提案いただいた内容等を含めて、ご自由にご討論いただければと思います。

(金斗官) 慶尚南道の知事の私が始めたいと思います。

韓国は現在、IT 大国となっております。そして、わが青少年たちが IT に非常に尽力しています。SNS、ツイッター、フェイスブックなどを通じて、コミュニケーションが活発に行われていますが、インターネットに接する機会が多いため、青少年たちのインターネット中毒者がたくさん増えています。社会的に見ると、38 万人ぐらいのインターネットを使っている学生にアンケートをしたところ、1.7%、6300 人余りがリスク群と分かりました。そして 3%である 1 万 2000 人ぐらいが準リスク群で、12%が重中毒状態であるということが分かりました。非常に深刻な問題であるということがここで分かったわけです。

慶尚南道では青少年の支援本部を中心に、家族キャンプ、カウンセリングなどを通じて、中毒の予防プログラムを推進しています。日本の県主導でインターネット中毒について良い治療方法など、方策が何かあればご紹介していただけないでしょうか。

(中村) 古川知事さんはお詳しいと思いますが、いかがでしょう。

(古川) ありがとうございます。

わが国でも中毒の予備軍と言われる若い人がたくさんいるという調査結果は出ています。だから、あまり使わせないようにしようという議論がある一方で、もっと韓国のように ICT を使いこなすべきだという議論も非常に強くあり、佐賀県は特に、ICT を使った教育をはじめとして、先導的に進めてきているところです。

確かに問題点もあるけれども、それよりも、これをきちんと使いこなす子どもたちを育てていくことの方がより大事だという考え方に立っているところで、中毒を防ぐためにどうするのかについては、日本国では中央政府のレベルでは問題意識があると思っていますが、私どもとしては、今はまだもっと使った方がいいのではないかと考えているところで

す。

韓国を見ていると、例えばポロロやカカオトークがありますね。ああいうものを一つ見ていると、韓国における IT 社会の進展具合は、日本よりも非常に進んでいるなど思います。ああいうものは、もちろんいいも悪いもあると思うのですが、良いにつけ、悪いにつけ、韓国の方がより進んでいるから、起きていることなのかと思っているところです。ちょっと分かりにくい話だったと思うのですが。

福岡などは、中毒の人が多そうと言うといけませんが、使う人はたくさんいそうですね。

(小川) 若者の数は福岡の方が多いたとは思いますが、私自身は具体的に何かをやっているということではなくて、今の問題であれば、私も古川知事のように、中毒に対して抵抗力があるというか、使いこなせるような能力をどうやって身に付けさせるかというのが大事なことのような気がします。

私が中央政府で働いていたときの経験でいくと、小さなお子さんに携帯電話を持たせていいかどうかという、いろいろな議論がありました。一方で、お子さんの安全を考えると、携帯電話を持たせた方がいいという親御さんもおられますし、子どもに携帯電話を持たせると、ずっとそれで遊ぶなどいろいろなことをするから、子どもとして必要な時間、大事なことに当てる時間が取れないなど、いろいろな議論がありました。しかし、結局、携帯は親がきちんと買わないと買えない、あるいは有害サイトにアクセスできないようにフィルタリングするなどのことはしていますが、実際に持って、その結果中毒になっている方についてどうするかという議論は、仮にあるとしても、これからのような気がします。私の知識ではそういう感じですが。

(中村) 韓国では大きな問題になっていますか。

(金斗官) 韓国では、非常に深刻な問題です。それを克服しようとする努力をしています。例えば 19 歳以下の青少年たちが夜遅くに接続するのを遮断するというプログラムを作ったり、ポルノプログラムにアクセスできないようにする、そして両親の住民登録番号が使えないようにするなど、そのような問題などがあります。スマートフォンや iPhone などの情報がすべてあるので、学生たちが携帯電話を通じてアクセスできるのです。しかし、授業中に使えなくする学校や、休憩時間だけ使えるようにするなどして、そして軍隊の中

で携帯電話を使えるのか、使えないのかという議論があったのですが、軍隊では禁止しています。公衆電話を使わせたり、休憩時間だけに限ったりします。さまざまな大きな問題点がありますが、情報化社会の基盤になっているものですから、金大中大統領政府の時代から IT を非常に推進して、韓国の重要な産業の一つであるため、克服するプログラムがさまざまにあります。

携帯電話やスマートフォンの中毒は、韓国の政治家たちの間でも非常に深刻です。会議中にも、自分が話しているとき以外は、スマートフォンで自分の情報を探するなどして、会議に集中できないのです。ある会議に行ってみると、ぜんぜん集中できないわけです。住民との対話においても、携帯電話を持っていなければ、誰かとつながっていない、阻害されたような気分を持ってしまうのです。だから、みんな携帯電話を持ちたがります。政治家たちや多くの人たちがそうなので、果たしてこうしたことが続く社会がいいのか、中毒よりも、社会の構成員たちのメンタリティがどうなのか。それを研究する人たちもたくさんいます。

そういう人たちが集まって意見を交わすことにおいては、大きなアジェンダについては人が実際に集まりますが、そこに集まる人たちの特徴は、国民全体の中でジェネラルな多数が支持して判断するアジェンダよりも、ほかのアジェンダをもって挑む場合が多いわけです。全体的なアジェンダとは関係なしに、既成世代が持っている価値観から離脱する傾向があります。社会全体がまた変わってってしまうわけです。ですから、政府も、無政府状態に近くなってしまわないかという懸念もあります。どのような社会が今後、到来するのか、予測が難しくなっています。中毒が日常化するという社会がどのようになるのか、こうした研究にも力を注がなくてはならないのではないかと思います。

(中村) 特に韓国の選挙運動でも、大きな問題になっていますね。

(金斗官) 決定的な影響力を持つほどのことになっています。著名な人たちがネットワークを、スマートフォンやツイッター、フェイスブックなどを活用して、ある特定の人を支持する 20 代などに非常に大きな影響を与えて、例えばソウル市長選挙などで当選を左右するぐらい、大きな力になりました。

(中村) なるほど。そういう意味では、むしろ IT 先進国は韓国なのかと思います。日本

でも、いろいろな会議等が開催される場合、まず最初に、携帯、スマートフォンについても「電源をお切りください、マナーモードにしてください」という注意が必ず入り、今のところ、そういう意味では一定のルールは守られているのかという思いはしておりますが。

ただ、地域生活あるいはもっとフリーな社会環境の中では、確かに大きな問題になっていく可能性はあるのかと思います。

(古川) 例えば国際会議をするときに、Wi-Fi の環境を提供することが、わが国ではそれほど多く行われていないのです。そのこと一つ取ってみても、やはりもっとそういう面では進めていかななくてはいけないと思うのです。多分、韓国の国際会議では、Wi-Fi の環境は当然のように準備されているのだろうと思うのですが。基盤整備はとにかくもっとわれわれは進めていかななくてはいけないと思いますし、新しい時代にふさわしいルールを考えていかななくてはいけないと思いますが、本当に難しい。世代によっても全然違います。話をしながら、一方でテキストングというか、携帯でメールを送るということは、私の世代というか、私は失礼だと思うのですが、子どもと話をしていると、お互いにそれはオーケーなのだ、話している相手がいるのに、ほかの人とコミュニケーションを取るということは全然失礼ではないということになっている世代の人が増えてくると、本当にどうなるのだろうと思います。

(金斗官) それがまさにどのような波及効果を与えるのかということですが、韓国で民主党があり、私は所属していますが、とても変わっているわけです。政党の党としては党を中心にしていきます。しかし市民党を持とうと。市民党である、インターネットに登録する。例えばフェイスブックで話し合う党員が必要である。どの程度のパーセントか。ですから、このアジェンダがとてもホットイシューになっているのです。政治に対する影響度はどの程度になるのか。自分が望まない発言をしている議員がいると、ツイッターでわーっと送ってしまうわけです、拡大します。そのような動きが大衆的な動きになります。また、そういうものがインターネット上で炎上していくわけです。

そうなると、今の論争的な内容については、政治家の判断力というのか、センサーを立てた状態でいなければいけないことになると思います。政治の現実、行政的な面においても、どのような影響を与えるのだろうかといつも考えています。

これから先、政治、行政、責任者の皆さん、責任を負う人たちは、しっかりと見極めて

選択をしなければいけません。その会議自体を閉鎖したとします。でも、どこからか中継放送をしてしまうのです。どこからか漏れます。「自分はそんな発言をしていない」と言っても否定できない。そういう時代になっているように思います。今は答えがありません。

(中村) ありがとうございます。

(小川) 今の「答えがない」というのは、私も思いますが、それに関連して軽い話題にしますと、Wi-Fiの話がありましたが、観光振興でいけば、ショッピングや観光施設の案内という意味では、エリアを決めてやっていくのは有用な手段ではないかと思えます。

それから少し話が飛びますが、スマートフォンのタッチパネル型になると、今、日本ではやっているのは、寒くなって手袋をします。そしてパネルに触ると動かない。ですから、指先のない手袋が今はやっている。それから、先はちゃんとあるけれども、特殊な加工をしてあって、そのまま触れる。そういうものが売れ筋商品になっているという意味では、このICTを中心にいろいろな事業分野、ニーズが広がっているのも事実なのです。ですから、その利便性を追求していくと、一方で陰の部分がありますから、そこをどう折り合いを付けるか、まさにおっしゃいました、これからいろいろな研究が必要だと思えます。

(中村) ほかにありませんか。先ほど、釜山広域市あるいは全羅南道から幾つかご提案がありました、青少年政策参加会議や、世界的な博覧会に修学旅行等を相互に派遣するようなシステムを作れないかというご提案をいただきましたが、何かご議論いただけますか。

(許南植) 韓国側では地域発展研究院が主導して、8 県市道が定期的に会ってさまざまな戦略を練っていると聞いています。日韓海峡研究機関では、よりそれが活性化され、専門家たちがいるので、市道県協力交流においてより専門的な、より高度なレベルの意見交流ができればと思います。

私は共同物流センターを構築することについて、研究してはどうかと提案しましたが、個別企業がそういう必要性を感じているようです。共同物流センターは、相手国家に対する輸出として、鉱業産物、農産物、畜産物などさまざまなものがありますが、個別の企業のレベルではそのような研究センターを設立するのは難しいです。ですから、韓国の場合、四つの市道が日本にセンターを作って、域内にある企業が一緒にそこを利用するわけ

です。日本においても、韓国のある場所にセンターを設立して、そこを共同で利用する。そうすれば、輸出などにおいて、お互いにとって非常に貢献するのではないか。それは中小企業にとっては非常にいいのではないかと思います。この場所で結論を出すのは難しいと思うのですが、八つの県市道で研究機関協議会がありますので、そこでより研究を進めて、これが妥当性があるという結果が出れば、推進していくのはいかがでしょうか。研究の検討をしていただければと思います。そうした趣旨で私が提言したわけですが、研究機関会議がより活性化されればと思います。県市道間での実質的な交流において、さまざまな効果や分析、より発展させる助言ができるような良い場になるのではないかと思います。

(中村) いかがでしょうか。日本側はどのようなお考えでしょうか。

(古川) 韓国には、四つの市道の枠組みでの発展研究院が既に存在しているということですね。

(許南植) そのとおりです。

(古川) われわれの場合ですと、九州の単位ではそういう研究をするところは存在しています。そういう中で、新しく別のものを作った方がいいのか、既存の九州の単位であるものを使っていった方がいいのか、われわれはもう少し検討しなくてはいけないと思います。確かに、われわれの地域にある企業で、今、許市長がおっしゃったようなニーズ、必要性を感じているところも多いと思いますので、そういうことを含めて検討する価値はあると私は思います。

(許南植) 新しい研究機関を作りましょうということではなく、既に既存の機会があるので、その協議会を作りましょうということです。実際に韓国では定期的に会って、そういう協議会をしているわけですから、そういう形以外にも何らかの、海外機関もありますので、海外でも実際にそのように整備していくのがいいのではないかと考えています。交流していくのがいいのではないかとということです。ですから、そういう需要がどの程度あるのかを調査する必要があるでしょうね。

(中村) 基本的には、これから共同して研究から入って行って、どういう組み立てが可能であるのか、そういう手続きを取っていくということによろしいでしょうか。

(小川) 具体的に一つのテーマとして、物流の共同化、効率化を提起されましたが、その問題についてある種の協議会を作って議論していこうということですか。それとも、協議会のようなものを作っておいて、その時々に必要なテーマを議論するのか。どちらのご提案だと受け取ればよろしいでしょうか。

(許南植) 実際に日韓海峡圏研究機関協議会が運営されています。例えば課題や研究している内容など、専門的な内容でより深く考えてはいかがでしょうか。新しい研究機関を作ることは全く必要ないと思います。現行の研究機関をもって、どの程度の重要性があるのか、また必要性はどの程度あるのか、将来的にどういう方向性があるのかという研究をまずしませんかという趣旨で申し上げました。

(中村) 研究機関の研究課題の一つとして、共同物流センターの可能性も模索していこうということになってこようと思います。

(許南植) そのとおりです。

(中村) ほかに何かご提案などございませんか。

(古川) 先ほど全羅南道の知事さんから、青少年交流をもっと進めていくためにどうしたらいいかという具体的な提案があったと思います。具体的には、8 縣市道の発表を聞いていても、それぞれ地域の青少年たちに国際的な経験を積ませることが必要という認識は共通であったと私は感じています。その意味で、全羅南道の知事さんのご提案は検討に値するのではないかと考えております。

具体的には、来年は麗水の国際博覧会などがありますが、それについてどう修学旅行をもっていくかということを考え始めると、多分、来年の修学旅行先は、今の時点では日本の高校は決めてしまっていると思うのです。佐賀県の場合は、麗水の博覧会に協力することになっているので、何校かの修学旅行にアプローチしていますけれども。ですから、この

会として、若者たちをたくさん連れていくということを具体的に検討するとしたら、2012年度からではなく、2013年度の実施に向けて、今から検討を始めておくことが必要ではないかと思いました。

いずれにしても、青少年たちをお互いに交流させていくことは非常に大事だと思うので、実施に向けて検討していくことにしてはどうかと私は感じました。

(中村) いかがでしょうか。

(小川) 私も賛成です。私の冒頭の報告でありましたように、年齢に合わせていろいろな交流の機会を作っていくことが大事です。特にお子さんの時代には文化・言葉・習慣の違いを簡単に乗り越えられますから、機会を増やすという意味では、ご提案の中学生ぐらゐの海峡の地域の方々、お子さんたちが交流するのはいいことではないかと。成功させるためにもきちんと詰めていきたいと思っております。

(中村) 恐らく、これからもいろいろな規模の博覧会、会議・フォーラム等が開催されると思うのですが、例えば博覧会が開催されるとなると、小中学生の参加はもちろんですが、幅広い住民の方々にも呼び掛けて参加を募っていく取り組みも必要になってくるのだらうと思います。しかし直ちに、例えば2012年の麗水博覧会に参加する枠組みはなかなか難しい面もあります。引き続き実務者レベルでの検討を進めて、前向きに取り組んでいくということよろしいでしょうか。

(小川) 賛成です。

(中村) ありがとうございます。それでは、ぜひそういう実務面を含めて、検討を進めてまいりたいと思います。

そのほかに何かございませんか。

(朴峻瑩) これに関連したことですが、私は青少年フォーラムと申し上げましたが、中学生たちを対象にしてみてもどうかと思って提案しました。国際行事以外にもですが。なぜかというと、韓国も日本も、高校生たちは大学入試の準備で忙しいのです。非常にプレ

ッシャーがかかって負担が多い。ですから海外に送るプログラムを高校生たちにするのは難しい面もあります。中学生たちが言葉も学んで、経験したこと、行ってきた感想を、私たちは冊子を作って発行するのです。とても楽しいのです。夜中の3時ぐらいまで読んだことがあるぐらい、とても面白いものでした。学生たちが自分たちで実際に書いているのですが。

そこで共通して見つかるのが、私は行きながら「高校はどこにしよう」「いい大学に行かなくてはならない」とそればかり考えていたのに、海外に行ってみると、あまりにも違う世界が広がっていた。開発途上国に行った学生たちはそれなりに、先進国に行った学生はその学生なりに、その現場を見ていろいろなものを感じているわけです。それがとても楽しくて、私は夜を徹してその冊子を読んだことがありました。ほかの文化、ほかの社会に接するという事は、青少年たちに非常に素晴らしい体験なのです。

私たちが重要に思う平和、協力というものを実践するには、後世の若者たちにもそういった価値観を共有させなくてはならないのです。若いときにそういうことに接することができる、それが適切なのは中学校ではないかと思っています。

さまざまな国際青少年イベントが活発に行われていますが、8市道県ではフォーラムを形成して、周期的に、1年に1回ではなく、2回でもいいので、そのように頻繁に、多くの学生たちが参加できるようにして、共同生活をして、フォーラムもしたり、終わった後には評価会議も行ったり、そういう場を設けると、お互いが理解を増進して、将来的にもより交流が活性化されるのではないかと思います。

国際会議の話をしたときに、8市道県がスポーツ大会をしてはどうかという話が出ましたが、中学生たちがスポーツ大会に参加しながら、県市道を回りながらそのようにできるわけです。ですから、いろいろなアイデアが出るのではないのでしょうか。フォーラムなどを一つ作って運営するのもいいのではないのでしょうか。費用はそれほどかかるわけではないので、いいと思います。キャンプなど、そのような形でしていくと非常にいいのではないかと思いますので、ここで提案したいと思います。ありがとうございました。

(中村) いかがでしょうか、皆さま。

実は長崎県では、雨森芳洲という外交官がおり、対馬と韓国との間の精神交流の考え方を提唱しました。この雨森芳洲先生にちなんで、芳洲外交塾を作ったことがあります。これは日韓の若い方々を主体に集まっていたいて、年1回いろいろな研修を設け、フリー

トーキングをしたり、共に同じ宿舎に泊まって、夜なべ談義を重ねたりといった取り組みがありました。

これは少し前にいったん廃止になったのですが、今、私は知事に就任し、こういう取り組みは息長く続けることが非常に大事なのではないかと。若い方々が次の世代にずっとバトタッチして行って、そうした両国の人脈が大きな財産になり得る可能性があると考えており、今のご提案については、さらにどういう形で開催するのがいいか、研究を進めていってはどうかと思っておりますが、いかがでしょうか。

(小川) 私も賛成です。先ほどご報告した福岡県は、アジア太平洋子ども会議は小学生がやっています。高校と大学もやっていますので、次に中学生にも同じような機会を与えられないのかと常々考えていました。今のご提案については、みんなでどういう形でやれるのか、検討していったらいいと思います。

(中村) ありがとうございます。

それでは、今回のこのご提案についても、実施を前提に、具体的に検討を進めていくことにしたいと思います。

(許南植) この20年間、青少年の問題や、時には高齢者たちが会議場に来て県市道の知事に直接質問を投げ掛けたり、交流もしたりというように、この会議が行われてきました。私はこの会議が成功するためには、知事たち、関係公務員たちが努力して会議をするだけでは足りないのではないかと思います。この地域のお年を召した方から若者に至るまで、男女もみんな含めて賛同してくれることでこそ、成功すると思います。1~2回やってみて、また違うことをしてみたり、新しいことをどんどんしていくのもいいのですが、これまで検討してきた資料を見て、どのようなアイデアを持って仕事をしたときに、最も旺盛に仕事が行うまくって好評を得たのかというアイテムを探し出して、それをより拡大化させていき、一つずつ新しいものにしていくといいのではないかと、会議のたびに次々にアイテムを新しいものに変えてしまい、それを極大化していくと非常に問題があるのではないかと思うのです。

八つの県市道において、関係公務員の皆さまが、今回、提議された内容まですべて含めて検討されて、必ずしも来年とは言わず、中間時点でも結構ですので、関係公務員たちが

集まって、顔を合わせなかったとしても、資料を交換するといった形を取ってでも、新しい発展的なアイテムを構想するというのもいいのではないかと思います。

より専門的で体系的な検討の下で交流・協力をしていくのがいいのではないかと思います。参考までに、先ほど済州の市長（知事）がおっしゃいました研究機関協議会に皆さまが関心を持たれたということで、もう一度お話ししたいのです。1993年の第2回会議のとき、この協議会を発足させようという話が出されました。そして94年9月に発足して、今まで話し合われています。研究について発刊された書物もありますし、四つの県市道から研究院が参加していますし、福岡のアジア都市研究所、佐賀の地域経済研究センター、長崎経済研究所など、さまざまな研究機関が参加しています。先ほど申し上げた物流センターなどで、より専門的な研究をして、可能性があると分かれば、もっとそれを極大化して推進していくようなシステムを、構築するといいいのではないかとということで申し上げました。研究機関協議会をより活性化して、研究をより進めていくのがいいのではないかとということで、申し上げたわけです。

（中村） ありがとうございます。

そういった方向性でよろしいでしょうか。さまざまな分野での可能性があるのだらうと思います。それぞれに研究機関の立場から研究を進め、効果的な事業であるということであれば、また試してみるという取り組みも必要かもしれないと思っています。

（朴峻瑩） もう一点申し上げます。韓国と日本、県市道間においては、交通機関が大変発達しています。特に釜山を中心として、済州などを航空機や船舶が行き来をしています。しかし、私が知事に就任した後を考えますと、全羅南道に関しては交通機関が皆無です。ですので、航空会社に対して、福岡空港にまずチャーター機を飛ばそうという話がありましたが、途中で中断しました。全羅南道の務安空港で、九州地域のあるところや、また大阪、東京地方に直行便を飛ばそうと努力しています。

その一環として、光陽という地域から下関に対して、何とか頑張って船を1路線、就航させるに至りました。昨年12月に就航が始まったのですが、あいにく地震、原発問題から日本への訪問客、また韓国に来る観光客も減り、大変難航しています。唯一の交通手段が、下関から光陽に来る手段なのですが、道が10億ウォン、光陽が10億ウォンで、20億ウォンを支援して運営しています。その運営結果を見ると、韓国からこちらに来るのは95%を

占めています。しかしながら日本から船に乗って光陽に来る観光客数は5%にすぎません。これはどういうことなのでしょう。韓国人が韓国に行くのに20億ウォンもの支援をしているのかという論争と指摘があるわけです。ですから道側としても、光陽側としても悩んでいます。果たしてどうすべきか、そのまま放置するのか。そうなると多分破産してしまいます。

釜山に近いので船が随分行き来していますね。釜山側からすると、どちらかというところ独占傾向であったのが、光陽側が来るのはちょっと、ということもなくもない。さまざまな状況があります。ですから、こちら側としては大変悩んでいます。全羅南道側は韓国の西海岸にあり、昔は交流が活発でした。しかし、アクセスのせいでなかなかうまくいかず、大変悩んでいます。ですから、知事の皆さまとともに、何かいい案やお知恵があれば、お借りしたいと思います。

(岡田) 今、知事さんがおっしゃったように、私ども山口県の下関と光陽の間の航路が開設され、就航して間もなく、いろいろな不幸な事件・事故がございまして、大変ご苦労されておられるというのは、私どももよく承知しています。就航に当たり、私ども県としてもいろいろな支援の仕方がないかということを検討し、できる限りのことはさせていただいております。しかし、今、知事さまも幾つかご指摘されましたように、いろいろな課題が多く、私ども行政の力だけではクリアしていくのがなかなか難しい状況もあります。今、知事さんからご提案のありました、ここは本当に日韓海峡を挟んで大事な航路であると思いますので、私どもとしても各県の知事さんから、いろいろな知恵やサジェスションがいただければ、大変ありがたいと思っております。

(中村) 今のご提案ですが、実は長崎県も来年から上海航路を復活させようと思っております。また、2014年ぐらいまでには釜山航路も、佐世保港との間に開設できないかということで港湾施設の整備を進めていますが、やはり旅客の安定的な確保が一番大きな課題になってくるものと思っています。特に国際航路の場合、お話にありましたように、韓国の利用者の方々が95%、日本のお客さまが5%ということになると、必ずしも相互の安定化につながる状況ではない面もあるのだらうと思います。

実は釜山―対馬航路も全くそういう状況で、私どもはこれから本格的に開設しようという航路については、インバウンド対策だけではなくて、アウトバウンド対策もしっかり組

み立てなければいけません。例えば上海航路については、九州各県の皆さま方にもご協力いただきながら、向こうからお迎えをする、同じようにこちらも出かけていこうという取り組みを進めていかなければいけないと思っています。その意味では、やはりもう少し広域的な観光ルートを、力を合わせて組み立てていく必要があると思っています。

これは後ほどご提案させていただこうと思っていたのですが、今の東日本大震災の影響で、大変海外からおいでいただくお客さまが減っているという状況です。先般、韓国をお訪ねして、韓国プロモーション活動を展開したときにも、韓国の方々自体が、今回の東日本の影響を受けて、海外からいらっしゃるお客さまが減っているという話を聞きました。確実にそういった中で、例えばクルージング船は着実に増えていくだろうと思いますので、もっと両地域が連携を深めながら、広域的な観点に立った観光商品の開発に力を注いで、そして積極的に情報発信、例えばクルーズ客船の誘致対策に取り組んでいく必要があるのではないかと思ったところです。定期航路もまさに同じような課題を抱えているのではないかと思いますので、そういう協働した取り組みができれば、一つの解決の方向性が見いだせないだろうかと思っています。

(古川) 佐賀県も、北部の唐津という町は、麗水市と姉妹提携をして40年になります。光陽はその近くの港でもあるので、あと数年後に唐津港の改修ができる予定です。例えばそのときに国際航路を開設することができるのであれば、われわれとしても、唐津と全羅南道との間の航路ができるということは非常に意味があることではないかと思っています。とにかく一日も早く、唐津港の岸壁やその他の施設の改修を進めていければと思っています。

また、前に新聞で見たのですが、務安空港と大分空港の間に航空路が開設される予定があるという話でしたが、それは検討が進んでいるのでしょうか。

(朴峻瑩) いまだ具体化はしておりません。ただ、日本の空港側から「行けたら」という意向は伝えられました。しかし、航空会社や旅行社側との兼ね合いが必要です。ですから、観光客数は増えているのですが、観光客が行くのはソウルとか釜山という都市に集中しています。

中国とは1週間に6便就航しています。中国には随分行くわけですが、中国からもたくさんの方が訪れています。全羅南道に関しては、日本側とは遮断され、閉ざされており、あ

なりに中国側に偏っています。ですから、航空機やカーフェリーをより活性化させたいという思いです。また、実際に干潟の訪問や山登りもするわけです。全羅南道は昔から貿易港として大変中心的な役割をしており、人口的に見ても、全南北・光州で見ると600万人になります。路線を何とか活用できれば、良い場所になると私は思っています。

(禹瑾敏) 私の経験談をお話ししてみたいと思います。昨年、私は1万2000人を一度に済州島に連れてくるという中国の観光グループを誘致したわけですが、日本の大地震の後、その旅行会社から、放射能の問題で、済州島に1万2000人が行くかどうかという問題が起こっていると聞いて、私はすぐに北京に飛びました。「何も問題はない、私を見てほしい」と言ったわけです。しかし中国から見た場合、あまりにも大陸は大きいので、日本と韓国は二国が一つにくっついているように見えるわけです。ですので、日本の被害はそのまま韓国の被害でもあるわけです。私はそのとき、「済州島は要所に放射能の検証施設があるので問題はない」と説明してまいりました。

中国の方の場合には、クルーズやカーフェリーを利用した観光客が激増しています。済州島の場合は、昨年クルーズ船が49回来ました。しかし今年は85便、来年は150便が予想されています。非常に増えているのですが、こうした方々が済州島を訪問されて、例えば釜山や済州島に行ったり、日本は大地震のせいでどうするのかという話はずっと続けられてきています。クルーズする地域には何も問題はないというPRは必ずしなくてはならないと言っています。中国の観光客たちはずっとそのことが気になっているのです。ですから、私たちはそういったことを一生懸命に説得しているわけです。

引き続きそのような広報活動はしていく必要があります、皆さまにもその備えはしていただく必要があると思います。

(中村) ありがとうございます。

引き続きそれぞれの地域で協力しながら、適正な情報発信に努めていかなければいけないと思っております。実は九州の知事会議でも、中国に対して観光プロモーション活動で、九州は安全ですというキャンペーンを張ったこともあります。また、いろいろな機会をとらえて、向こうの報道関係者、旅行業界の皆さまにもおいでいただいて、安全を実際に体験していただくような取り組みも進めていますので、併せてそうした可能性も模索していかなければいけないと思います。

だいぶ時間がオーバーしましたが、ほかにご覧いませんか。

ないようでしたら、ありがとうございました。これで自由討論の時間を締めさせていただきます。

住民との対話

(中村) 続きまして、これから住民の皆さま方との対話を行いたいと思います。この住民の方々との対話は、この会議をより開かれたものとするために、住民の皆さまからご質問をいただくものでして、本日は本県の住民4名の方々にお越しいただいたところです。

質問に対するご回答については、韓国側の知事さま、市長さまにいただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

早速、進めさせていただきますが、まずは長崎県立対馬高等学校の田中花保里さまから、釜山広域市の許南植市長への質問です。田中花保里さんは長崎市のご出身ですが、先ほど私の方からもご紹介させていただきました、県の離島留学制度を使って対馬高校に進学をされ、韓国語などの勉強に励んでおられます。

それでは田中さん、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(田中) よろしくお願いします。

私は韓国人歌手のBOAが好きで、韓国に触れる機会がありました。そこで、韓国語と韓国の歴史や文化について学ぶことができる対馬高校の国際文化交流コースに進学し、現在2年生です。高校ではさまざまな経験をしています。中でも韓国語学研修で韓国の学生たちと交流を深めていき、将来は日韓関係の向上に役立つ人材として、日韓外交に携わっていきたいと思うようになりました。高校卒業後の進路として、韓国の大学への進学を考えているのですが、韓国の大学に進学する場合、支援制度が何かあればお聞かせください。

(中村) それでは南植さん、よろしくお願い申し上げます。

(許南植) 韓国の各大学においては、外国人留学生を誘致するため、随分努力をしています。また、たくさん留学もしています。釜山の場合は7000人を超える留学生がいます。また、各大学においても、外国人留学生に対してもちろん奨学金を支援し、例えば学生寮の提供や、留学生が早く韓国語を習得できるようなプログラムや、歴史・文化体験学習などを通じた機会も提供しています。

釜山広域市の立場からも、外国人留学生に対して、不便なことがないように関心を傾け、市の方からも支援できる施策を推進しています。先ほど田中さんが良いお話をしてくださ

いました。韓国、特に釜山の大学に留学なさるならば、不便なことがないように、私が十分に気遣ってお手伝いしたいと思います。また、たくさんの学生が来てこそ、これからの将来に寄与できることになると思います。素晴らしい韓国専門家として羽ばたくことをお願いしたいと思います。対馬は釜山ととても近い距離にあり、また並々ならぬ関係があるわけです。

(田中) ありがとうございます。

もう一ついいですか。日本人と韓国人が、もっとよりよく理解し合うために、さまざまな場面における交流が重要だと思います。私も対馬高校において、たくさんの交流を経験した中で、お互いのことをよく知ることができたと思います。釜山市として、高校生などによる青少年の交流について、どのような取り組みや計画を実施されているのか、お聞かせ願います。

(許南植) 青少年、特に高校生間の交流は、両国間、また両地域間の実際の実践交流がとても大事な経験になると思います。釜山の14の高校が、日本の高校と姉妹校になっています。さまざまな授業参観やホームステイも持続的に行って、推進していることを申し上げたいと思います。

先ほど申し上げました高校間の交流もちろんですが、大学生間の姉妹校締結や交換学生プログラム、大学間の共同講義など、さまざまな分野における交流が行われています。この知事会議のテーマも青少年の育成、また交流なわけです。これからもやはりこの交流こそが大事で貴重なものであると考え、積極的に進めていきたいと思っています。高校生間の交流がより一層活性化することを祈っております。ありがとうございました。

(田中) ありがとうございました。

(許南植) ぜひ、釜山に1回来てくださいね(拍手)。

(中村) ありがとうございました。

続きまして、新上五島町商工会女性部の中野千尋さまから、全羅南道、朴峻瑩知事に質問をいただきます。中野さんは新上五島町商工会女性部長として、韓国人観光客を新たに

たくさん呼び込もうと頑張っておられます。それでは中野さん、よろしくお願いします。

(中野) こんにちは。このたび、全羅南道知事さまにご質問する機会をいただき、とても光栄に思っています。どうぞよろしくお願いします。

新上五島町をご存じでしょうか。長崎市より高速船で約90分のところにある五島列島の北部に位置し、平成16年に五カ町が合併して誕生しました。人口約2万2000人、平地が少なく、七つの有人島と60に及ぶ無人島から成っており、島々の景観は西海国立公園に指定されています。主な産業は漁業が中心ですが、かつて遣唐使から伝えられたと言われている幻のうどん、五島手延うどんや島に多く自生しているヤブツバキの実を搾油した椿油、自然海塩などの特産品の販売、そして長い弾圧に耐え、祈りの場として大切に守られてきた29ものカトリック教会群は、平成19年に「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として世界遺産の暫定リストに掲載され、「明日の世界遺産に出会う島・上五島」をキャッチフレーズにして、電気自動車が走る環境にやさしい島として、観光に力を入れています。近年では、韓国からの巡礼者も増加傾向にあります。

そこで、知事にお伺いします。町としては韓国人旅行者のさらなる誘客を目指して、今年度より韓国人観光客誘致専従職員として、韓国光州市出身の林根昊（イム・グンホ）さんを採用し、地元の商工会女性部の皆さんに韓国の文化や習慣について学ぶ「おもてなし講習会」を開催したり、韓国釜山市での観光商談会に参加し、町長自らトップセールスをし、モニターツアーの開催など、さまざまな取り組みをしています。

今後も新上五島町では官民一体となって、カトリック教会群への巡礼を柱として、自然や食などを味わっていただき、観光客の増加を図っていきたくと考えていますので、ぜひ全羅南道の皆さまにもお越しいただきたいと思っています。そのためにも本町の教会群の魅力や観光情報をどのように発信したらよいのか、また韓国からのお客さまを受け入れるにはどのようなシステム、心構えが必要なのかを教えていただければと思います。

今日は本町で作成したパンフレットも持参しております。後に韓国に知事さま方にご覧いただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(朴峻瑩) 新上五島町の中野千尋さん、島に対する説明を聞いていますと、全羅南道の島を説明しているようで非常に親近感を覚えました。全羅南道も海岸線の長さが6600kmで、2218の島があります。その中で約300の島には人が住んでおり、1700の島は無人島と

なっています。先ほどおっしゃったとおり、そこは多島海海上国立公園として指定されています。そして、世界ラムサール条約に干潟として指定されており、アメリカのFDAで自然の水産物の生産地域に指定されています。そして、先ほど話にも出ましたが、韓国国内で干潟で作られた天然塩の87~90%がここで生産されています。似ているので、私の全羅南道を説明しているのかと思ったぐらいで、非常に感慨深かったです。

多島地域については非常に興味を持ち、私もぜひ行ってみたいと思いました。お互いに相互訪問をして、どのようにしたらいいのかと一緒に考えてみるのもいいかもしれません。われわれも同じような悩みがあるのです。われわれは自信を持つ必要があるのではないのでしょうか。最近の流れでは、修学旅行も一般の旅行客もそうですが、どこかに行って、何かいっぱい見るというよりも、行って休憩したい、行って休みたいという観光客が増えているわけです。その理由は、最近、仕事をする人たちの働くパターンが大きく変わっているからです。昔は日課が終わったら終わりでした。しかし、先ほどもお話がありましたが、携帯電話やフェイスブックなど、寝ている時間にも仕事をしているような、非常に疲れる日常なのです。コンピューターで仕事をするので、体の中にある内臓は非常に縮んでしまっていて、正常な人でさえも「もう休みたい」「もうへとへと」という状況になっているわけです。

私は、その地域の特徴が非常に似ていると思ったのです。電気自動車などを使っているところも似ていると思いました。われわれの道央でやっていること、そしてカトリックの聖地が多いところもです。

参考までに申し上げますと、韓国には宗教の中で仏教人口が1700万人、キリスト教はプロテスタントが800万人、カトリックの人口が500万人です。カトリックはだんだん増えている傾向にあり、プロテスタントがだんだん少なくなっています。聖地の巡礼プログラムが非常に増えており、教会や教団ごとにも、そのようなプログラムを組んでいます。私と兄は実際は宗教が違い、兄はカトリックなのですが、もう行ったことがないところがないぐらいなのです。あちこちに行っているのです。「なぜそんなに行っているの」と聞いたら、いろいろなプログラムがあるからということでした。

大韓民国の国民にとって、日本は仏教を信じる人口が多く、仏教寺院が多いことはよく知られているのですが、このようにカトリックの教会が多いことは比較的知られていないのではないかと思います。先ほどお話の中に、カトリックが島で発達したさまざまな理由がありますが、島のそういった概念をもって信徒たちにアプローチすれば、非常に効果

的なのではないかと思いました。

二つ目です。われわれは宿泊施設などに力を注いでいます。いい宿泊施設というよりも伝統的な、昔の民泊や自然を体験できるところです。世界のトップ5に入るぐらいの素晴らしい干潟があり、そこには塩田もあります。そういうところを見学するツアーができます。塩だけでもいろいろなテーマのプログラムができて、漁村に行くと宿泊施設は少ないのですが、宿泊施設さえしっかりしていればいいのではないかと思います。そのような備えが必要です。

日本は、われわれよりも早くスタートされているかもしれませんが、われわれは昔の伝統的な家、民泊に支援をしているのですが、非常に効果的です。日本にはあちこちに温泉がありますが、以前山口に行ったときに道端にいろいろな足湯などがあって、非常に面白かったです。韓国人たちは、非常に温泉が大好きなのです。それで温泉ツアーが大人気なのですが、そういう温泉ツアーも一つにして、ツアーを組んでみるのもいいのではないのでしょうか。

もう一つ、少し面白く申し上げますと、干潟がある道立公園を作ったわけですが、道立公園の前には干潟センターを作って、その干潟について知るような施設を作っておいて、そして干潟に実際に行ってみて、実際に足を着けなかったとしても、周辺の生き物たちを見ることができるように作っているわけです。すると学生たちがたくさん来ます。韓国の学生たちは、騒がしい観光よりも、ちょっと休める、心安らぐ観光にシフトしてきているので、非常に競争力があるのではないかと思います。慶尚南道など、この周辺の地にはたくさんの観光地もあり、全羅南道はあまり交通の便が良くないのですが、一緒に手を組めば非常にいいのではないかと思います。

中野さんも一度われわれのところに来てくださって、一緒にセミナーをしたり、一緒に考えていくのもいいのではないのでしょうか。とても素晴らしい質問をしてくださいます。ありがとうございました。

(中野) ありがとうございました。私もぜひ、全羅南道に行きたいと思います。どうもありがとうございました (拍手)。

(中村) ありがとうございました。

それでは続きまして、雲仙市観光協議会の山口信人さまから、済州特別自治道の禹瑾敏

知事さんへご質問をさせていただきます。山口さんは雲仙市観光協議会事務局長として、外国人観光客の方にも楽しんでもらえるようなまちづくりに取り組んでおられます。

それでは山口さん、よろしくお願いします。

(山口) こんにちは。雲仙市観光協議会の山口と申します。よろしくお願いします。

私たちは、今、知事から紹介がありましたが、諫早市のウエスレヤン大学と共同で、県の補助を受けて、留学生とともに進める地域観光、国際地域観光化の事業をやっています。どういうことをやっているかと言いますと、留学生の皆さんたちを雲仙市内はもとより、島原半島を連れ回りまして、いろいろなチェックをしてもらっています。留学生の目線から、こういうものが欲しいなど、観光マップの作成を彼らにしてもらって、彼ら目線の情報という形で取り組みをやっているところです。

その中で、特に外国人観光客の受け入れという形で、どのような整備や、観光環境整備で注意すべき点などがありましたら、教えていただきたいと思います。

(禹瑾敏) 山口信人さん、濟州島にお越しになったことはありますか。

(山口) 私は行ったことがないのですが、実は私の仲間会が去年、濟州島に行っていて、そのときの旅行のDVDをもらっていますので、そちらを見させていただいています。

(禹瑾敏) 一度、濟州島にお越しいただいて、道知事室においでいただいて、お茶を一杯飲みましょう。

先ほどの学生のチェックをさせているという話ですが、実は私は8時ごろ到着して、濟州島出身である長崎大学の留学生を呼んで、一緒に夕食を共にしました。「一生懸命頑張って勉強しなさいよ」「長崎でたくさんのもを収穫して返ってきなさい」という話をしました。

濟州島は観光地として、70%近くを観光に依存しているというのが実情です。ですから、観光に力を注いでいますが、まだ不十分な点もあります。細かい部分に関しては時間の関係上お話ししませんが、濟州島の場合は、日本人のための観光システムが発展しているとお考えいただければいいと思います。

これまで外国人観光客は、2~3年前ぐらいまでは、ほとんどを日本人観光客が占めてい

ました。ただ、残念ながら大震災により、日本人観光客数が減少しました。その一方、中国人観光客が大変増えている実情にあります。まず、その観光客が訪問するためには、アクセスが良くないといけません。まず東京、名古屋、大阪、福岡の直行便が就航しています。済州空港は1分46秒ごとに飛行機が離着陸しています。空港のキャパシティーはいっぱいいっぱいのフルの状態、ホテルは2万7000ルームを保有しています。例えば個人旅行等をしてきた場合にも、ペンションも随分完備されています。ゴルフ場についても29カ所あります。また、ゴルフ場ごとのリゾート施設が完備しているので、全体に見ますと500ルームや300ルームもあるわけです。

もちろん、アクセスの面でも、クルーズ船が随分就航し、寄港しています。クルーズ以外にも、むしろフェリーで来る方を好む場合があります。実際には船の中で宿泊をするわけです。しかし、フェリーの場合は済州島に来て宿泊するような方法を、こちらとしては勧めています。

先ほど言いましたように、食べ物も重要です。日本人の口に合わせた飲食系が随分開発されています。ですから、済州島の特産である黒豚や海産物、魚は大変新鮮です。中国人ほど料理は秀でていませんが、食材が大変いいので、味が大変おいしく楽しめるという点があります。

また、女性のためのブランドショッピング用のアウトレットが、まだ不十分な状態です。免税店はあるのですが、アウトレット系が欲しいという指摘もあります。また、最近では費用をかけずに行く方法、全羅南道の知事がおっしゃったようにバックパッカーのタイプの旅行です。オレッキルといいまして、いわゆる登山道路を散策するような方法もあります。今年末までに観光客が1000万人程度訪問するのではないかと見通しています。

また、夏の休暇の時期が過ぎると、観光客が訪れずにシーズンオフになったということが以前はあったのですが、最近はシーズンインもオフも全くありません。観光客がひっきりなしに訪れる、あふれかえるような状況にあります。

準備するべきものとしたら、今までは日本人観光客がずっと訪れていましたから、日本語が流暢なガイドは人材が多いのです。しかし、中国語の部分に関しては、まだ弱い面があります。ですから、例えば国際結婚などの基盤による多文化家庭と言われている人たちを案内役として、通訳士として育成します。中国人でありながら朝鮮族の皆さん、例えばハルビンや延辺の近くといった地域の出身の方々と、韓国に定住している人たちは、韓国語が流暢ですので、案内をするわけです。そうすると、中国人観光客の立場からすると中

国語も流暢なので、全く不便がないという評価をいただいています。

また、ほかに何か必要な情報があれば、海路を経てアクセスしているという話をしましたが、クルーズ船のオープンがまたありまして、クイーン・メリー2号が長崎港に接岸したと聞いています。その程度の規模の大変大きな船舶が入れるクルーズ港を構築しています。そうすると、大きな船舶もアクセスしやすいのではないかと思います。

答えになりましたでしょうか。

(山口) 先ほどちょっと知事会議で出た Wi-Fi 環境の整備と、マップに Wi-Fi を使える地域の落とし込みをぜひやってくれという強烈な意見が出されていました。

もう一点ありまして、私ども住む雲仙市は島原半島ジオパークがあり、先ほど知事の方からも紹介がありましたが、来年5月に世界ジオパークのユネスコ会議が開かれます。済州道が世界ジオパークに認定されて、その絡みで、どのようなことで観光振興を行っているのか、お伺いしたいと思います。

(禹瑾敏) まず、昨年10月に世界ジオパークとして認められました。このジオパークに対する審査は、ユネスコ側は3年に1回調査をします。それがきちんと合格できないと脱落してしまうわけです。ですから、ジオパーク管理を考えた道内の組織を構成しました。絶えずジオパークを保全し、管理するための条例を作るための準備を進めています。

来年、雲仙でその会議を行うときに、われわれ道側からも参加するよう準備を整えています。済州島は火山地域ですから洞窟が大変多いのですが、しっかりとこのような地形を管理すべきであるという点があります。洞窟が発見されると、そこに生息する自然生物や、例えば昆虫など、生態系にどういう影響を与えるのか分かりませんので、手を触れられない洞窟もたくさんあります。ですから、専門家を採用し、しっかりと管理すべく推進しています。

われわれも、実は昨年10月に認定を受けました。また、2007年度に自然遺産の登録を受けました。青森県の白神山地にある自然遺産の現場を視察してきました。そのベンチマーキングの必要性を感じましたので、行ってきました。来年度は雲仙の方に参加したいと思います。

(山口) ありがとうございます。来年5月、雲仙岳のオルレコースも作っていますの

で、皆さんをお待ちしています。どうぞよろしくお願いします。ありがとうございました
(拍手)。

(中村) はい。ありがとうございました。

続きまして、長崎県日韓親善協会の吉川俊男さまから、慶尚南道金斗官知事への質問です。吉川さんは、長崎県日韓親善協会常任理事として、長年にわたり民間レベルでの韓国との交流に活躍をしておられます。それでは吉川さま、よろしくお願いします。

(吉川) こんにちは。私は長崎県日韓親善協会の吉川と申します。慶尚南道、金斗官知事に対して、2～3、お願いやお尋ねをしたいと思います。

長崎県日韓親善協会は、日本で最初に設立されたもので、本年9月、創立50周年を迎え、韓日親善協会中央会の金守漢先生や、県内の政財界人の方々のご出席を得て、記念式典を実施しました。これまで微力ながら日韓関係のさまざまな行事に協賛し、民間レベルとしての日韓交流事業を行ってきました。最近の一例を挙げますと、数年前にヒマラヤトレッキングを行った際、韓国のとある小学校の先生と知り合いました。それがご縁で、小学校の授業参観や子どもたちとの給食を共にする機会がありました。

その席で、日本のことについて尋ねたところ、「東京、大阪、北海道」という答えが返ってきました。引き続き、原子爆弾のことについて尋ねたところ、「広島」ということで、「長崎」という地名は出てきませんでした。また、食事が終わったところに、一人の女の子が私の席に来まして、「私のおじいさんは、『日本人は人に非常に親切だよ。おまえも親切な子どもになりなさい』と言っていた」とあいさつに来ました。私はこの言葉に感動し、この子らのために何かしてやらねばと思い、韓国の帆船コレアナ号を介して、日韓両国の中学生との絵画の交流を行い、それぞれの相手国で展覧会を開くことになりました。今後、体験学習などを幅広く進めていこうと思いますが、民間団体としては限度があるので、このことについて、バックアップをお願いしたいと思っております。

次に、私たちは隔年ごとに訪韓旅行を実施しており、本年も50周年記念事業の一環として、9月に3泊4日の旅行を行いました。残念ながら、観光旅行の範囲で、住民との対話をする機会はありませんでした。今後、住民との対話の機会を作っていただけませんか。また慶尚南道でお勧めの場所がありましたら、教えていただけないかと思っています。

次に、慶尚南道は鎮海の桜まつりなどのほかに、蔚山の鯨祭りや晋州の南江流灯祭りな

ど歴史ある行事や、西生浦（ソセンポ）の城跡などの遺跡があります。しかし、日本における知名度がほとんどないという感じがします。今後、このようなことについてのPRをしていただく予定はありませんでしょうか。

最後になりましたが、私たちは慶尚南道を中心とするアマチュア無線愛好グループと交流を図っています。さる3月の東北地震については20万円の義援金をいただき、早速、日赤を通じて被災地に送らせていただきました。このようなことで昨年は福岡県北九州市で、今年は慶尚南道の晋州市で、来年は長崎市で交流会を開催する予定にしています。行政としてバックアップしていただけるならば、さらなる交流の促進が期待できると考えていますが、このような民間同士の活動をサポートしていただくことはいかがでしょうか。以上、お願いします。

（金斗官） 吉川俊雄日韓親善協会の常任理事さんから、韓国の交流についてさまざまに発言してくださいました。そして慶尚南道を含めて、日本と韓国が非常に近づく、いい、大きな役割を果たされたようです。韓国についてとてもよくご存じのようで、とてもうれしいです。特に韓日親善協会中央会の金守漢会長、私もよく存じ上げています。私もよく訪ねていろいろ話をするのですが、その金守漢会長について言及してくださいまして、心よりお礼を申し上げます。

慶尚南道は釜山と隣接した蔚山広域市とくっついた地方自治体です。慶尚南道は海岸線がありますので、420余りの大小の島があります。そして智異山（ちりさん）、伽耶山（かやさん）、漢拏山（はるらさん）などの国立公園も持っています。さまざまな観光遺跡がたくさんありますが、日本の九州地域にはあまり知られていないようです。

幾つかご紹介しますと、仏教の文化遺産であり、世界文化遺産である八王大蔵経があります。木に書いた、1000年たったものです。それは今年フェスティバルがあったのですが、そこに山口県の学生たちが来ました。八王大蔵経が保管されている陝川の海印寺（ヘインサ）という朝鮮時代のお寺です。

そして世界ラムサール総会で保全湿地として指定された、原始の湿地である牛浦沼（ウポヌプ）は、さまざまな野生生物が生息している国内外で非常に有名な場所で、研究者たちもたくさん訪れます。そして固城（コソン）の床足岩（サンチョガム）もあります。ここにも非常にたくさんの観光客が訪れます。

慶尚南道は釜山や済州ほど多くはないのですが、年間340万人ぐらいの観光客が訪れて

くれます。常任理事さんは、知られていないということを非常に心配してくださって、PRをどうするのかと質問してくださいましたが、国内だけでなく海外にもアピールしようとして努力しています。特にインターネットサイトです。ヤフージャパンなどにブログを開発していますし、1週間に四つぐらい記事を上げています。それで日本語で日本の方たちに情報を発信しています。オンラインではそのようにしています。

オフラインでは、福岡港に慶尚南道のイメージ看板、イメージ広告を掲げています。そしてファムツアーなども実施していますし、観光、広報説明会なども1年に2~3回は行っています。今年は来年初めにも上海で行うつもりですが、日本でも行うつもりです。慶尚南道を日本によりアピールできるように、一層努力をしていきたいと思えます。

韓国人は、日本に対してさまざまな複雑な感情がありますが、韓国の若者たちは日本の先進文化をベンチマークするというか、非常に目標にするという傾向があります。韓国人は日本を「近いけれど遠い国」と言っていて、それは感情的なことだったのですが、今はもう「近くて近い国」であること、北東アジアの共同繁栄と平和のために文化交流等も、経済・政治交流も非常に重要であることを、みんなが認識しているのです。沿岸県市道の知事会議がそれをリードして、それをより発展させる大きな役割を果たしていると思えます。

先ほど短い時間で青少年交流についてお話ししたので、詳細については申し上げられなかったのですが、慶尚南の市、道においては、日本の市、県の方から、常時いろいろな学生たち、若者たちが交流でやってきているわけです。こういうことも続けていく必要があると思えます。

また地震のとき、アマチュア愛好家たちがさまざまな情報に接して、そこでまた交流が活発化したということですが、アマチュアの無線愛好家たちも来年、長崎でその会議が行われるようですが、まだ予算は編成されていませんが、吉川理事が提案してくださったので、われわれ帰って、持ち帰ってすぐに議論してみたいと思えます。交流がより活発になるように、そういったことを通じて努力をしていきたいと思えます。ありがとうございます。

(吉川) どうもありがとうございました。

(中村) どうもありがとうございました。

今日は大変限られた時間ではありましたが、4名の住民の皆さまに、活動や日ごろのご体験から貴重なご質問をいただきました。本日ご質問いただきました皆さま方には、今後ともそれぞれのお立場で、また日本と韓国、長崎と韓国の交流拡大のためにご活躍いただきますようお願いいたします。

また、韓国側の知事さま、市長さま、誠にありがとうございました。

それでは以上をもちまして、住民の皆さま方との対話を終了させていただきます。ありがとうございました（拍手）。

さて、だいぶ時間もオーバーしてきましたが、一応、本日予定していました議題はこれですべて終了しましたが、特にこの際、何か知事、市長の皆さまからありませんでしょうか。

ないようですので、これをもちまして第20回日韓海峡沿岸県市道交流知事会議を終了させていただきます。ご協力を賜りまして、本当にありがとうございました。